

一般財団法人 日本出版クラブ 理事会・評議員会開催 2024年度事業計画・収支予算が承認される



出版クラブ会報
No.622

2024年3月26日(火)、一般財団法人日本出版クラブ理事会並びに評議員会を開催し、2024年度の事業計画・収支予算が承認された。

収支予算において、2024年度の事業活動収入は、会館事業が前年度好調だったことを受け、前年比予算3,351万円増の1億4,638万円を見込む。対する事業活動支出については、宴会部門の受注増に伴うケータリング費用(材料費支出)の増加で、前年予算比2,910万円増の1億4,391万円。事業活動収支差額は前年予算比441万円増のプラス247万円を見込んでいる。

なお、2024年度の実業については以下の通りである。

2024年度の主な事業

(1) 研修会「紀伊國屋書店が目指す出版流通と書店」<出版枠会との合同開催>

日時=2024年4月3日(水) 午後3時より

会場=出版クラブホール

講師=藤則幸男氏 ((株)紀伊國屋書店代表取締役社長)

(2) 第63回全出版人大会

日時=2024年5月7日(火) 午後3時より

会場=ホテルニューオータニ 鶴の間

大会委員長=喜入冬子氏 ((株)筑摩書房代表取締役社長)

*恒例の長寿祝賀・永年勤続表彰による出版人に対する顕彰とともに、大会声明採択・記念講演会等、出版文化の昂場の場としていく。

(3) 出版平和堂 第56回 出版功労者顕彰会

日時=2024年11月6日(水) 正午より

会場=箱根 出版平和堂・箱根ホテル

*出版物故者の調査をもとに出版功労者を顕彰

(4) 第72回読書のめぐみ運動

開催期間=2024年10月中旬~2025年2月

*維持員社はじめ出版関係会社の善意により、児童福祉施設・矯正施設等に図書のを寄贈をおこなう。

(5) 出版関係新年名刺交換会

日時=2025年1月7日(火) 正午より

会場=出版クラブホール

*野間省伸・日本出版クラブ会長等、出版5団体の代表が新年の抱負や決意を業界内外に表明、『出版クラブだより』への名刺広告協賛も含め、出版文化の昂揚並びに親睦・交流の場とする。

(6) ライブラリー企画展—小さな本の展覧会等

・「世界の子どもの本展—JBBY 設立50周年記念展示」<4月2日(火)~5月31日(金)>

・「大阪書林 御文庫講 創立300年記念展」<6月3日(月)~7月31日(水)>

・「次世代辞書研究会展」<8月1日(木)~9月25日(水)>

・「2024年 第57回造本装幀コンクール作品展」<9月30日(月)~11月4日(月)>

・「ジェンダー展」<11月7日(木)~11月29日(金)>

・「第65回日本雑誌広告賞 入賞作品展」<12月2日(月)~1月15日(水)>

・「枠会出版文化賞・新聞社学芸文化賞受賞社展」<1月16日(木)~3月31日(月)>

主な記事

- ▽一般財団法人日本出版クラブ 理事会・評議員会開催
- ▽2024年度事業計画案・収支予算案が承認される
- ▽東北視察バススタディツアー(三陸沿岸編) 報告
- ▽復興の街 復興の書店 復興の図書館
- ▽時の記憶 場所の記憶—三陸鉄道学習列車—千代川らんさん
- ▽第71回読書のめぐみ運動 96社より1万8千余冊の図書を寄贈
- ▽2024年 出版関係新年名刺交換会開催
- ▽出版歳時記 真と嘘と映画の話

4月23日は
こども読書の日

東北視察バススタディツアー(三陸沿岸編) 報告

― 復興の街 復興の書店 復興の図書館 ―

東日本大震災から13年経った3月22日(金)〜23日(土)、三陸沿岸部の書店・図書館の復興状況を視察するため、第9回のバススタディツアーが開催された。

今回は、震災当初より読書環境を調査するため現地入りした、図書館コーディネーターの鎌倉幸子氏をナビゲーターとして迎え、小学館・相賀昌宏会長、集英社・堀内丸恵会長をはじめとする23名が参加した。

視察先は1日目に釜石市・桑畑書店、大槌町立図書館、大槌町・一頁堂書店、山田町立図書館、山田町・大手書店。2日目には三陸鉄道震災学習列車で南下し、気仙沼市図書館と気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館の視察をおこなった。各所年度末のお忙しいなか丁寧にご対応いただき、参加者は震災から13年経った今の詳細な報告に耳を傾けていた。

本欄では、バス車中にて各所紹介をおこなっていたたいた鎌倉氏のサポート役の早稲田大学文学部三年・中尾洸太氏にレポートしていただく。

3月22日(金)、まだ肌寒い冬の風を感じながら一泊二日の東北ツアーが新花巻駅から始まりました。震災当時よりは少し暖かいですが、雲が空を覆っており、空気が引き締まっています。

最初に伺ったのは釜石市の桑畑書店。学校への教科書販売が忙しい中、震災から今までの取り組みについてお話ししていただきました。ここは釜石市内の個人書店で、震災の際は多くの図書が流され、一億円以上の損害を被りました。しかし、「町の本屋さん」としての使命感から店舗を新しく構えられ、前の店舗の6分の1の規模ながら今

も経営されています。作家の佐々涼子さんはじめ、多くの方々のイベントや地域でピブリオバトルを開催しており、店内にある様々な色紙が人との「縁」を非常に大切にされている様子が窺えました。



震災前の大槌町内のジオラマで説明をおこなう岡野治子図書班長(右から2人目)

次に訪れたのは大槌町立図書館です。ここも津波で甚大な被害を受け、閉館を余儀なくされました。2018年に開館した、町のふれあいセンターである文化交流センター「おしやっち」の中に図書館が併設されています。当日伺ったのは平日の昼間ですが、地域の子供達やご年配の方々が多く集っており、文化交流センターとして町のシンボルとなっています。特徴的な

は、交流センターが1、2階で図書館が3階にある点です。津波の脅威を踏まえ、資料の散逸を二度と起こしてはならないと図書を高いところに設置する工夫をされました。職員の方々の図書を大切にしている熱い想いが伝わってきました。

そして同じ大槌町にある一頁堂書店。シーサイドタウンマストという商業施設のテナントの一つであり、時には町立図書館と提携しながら住民に本を届け続けています。木村薫店長にお話をいただくということで、案内いただいたのは商業施設の屋上。町の景色が一望できます。そこから震災時の写真と景色を見比べながら、当時の被災体験のお話をいただきました。押し寄せる津波と揺れ、寒さ。私たちが伺ったのも当時と同時期なので、特に寒さに関してはよりリアルで、お話が心に沁み



店舗が入る商業施設の屋上で説明をおこなう一頁堂書店・木村薫店主(中央)

ます。この屋上に避難した方々は街が吞まれていく様子をどんな気持ちで見ているのでしょうか。



未だ木の香りがしてきそうな山田町立図書館

次に伺ったのは山田町立図書館です。こちらも先程の大槌町立図書館と同様、交流センターと併設された「はびね」という施設の中にあります。三陸鉄道の陸中山田駅のすぐ目の前ということもあり、地元の子供達が集う場所となりました。こちらのコミュニティスペースは斬新なことに町の有志である子供達が一から設計に加わっており、低めの小上がりや交流スペースなど、完全に使い手である市民の目線に立って作られています。震災は多くの人や町を破壊しましたが、それをきっかけにした新しい芽吹きも、駆け回る子供達から感じられるような時間でした。

1日目の最後に巡ったのは同じ山田町の大手書店です。大手書店も桑畑書店と同じ、震災で

翌3月23日(土)に、宮古市にある宮古駅から釜石市の鶴住居駅までの三陸鉄道・震災学習列車に乗車しました。そこでは当時小学6年生で被災し、現在三陸鉄道の職員として勤務され、震災学習列車の語り部をされている千代川らんさんに震災当時の写真パネルを見せていただきながら、当時の震災体験をお聞きしました。当時は一家バラバラのところにおり、お姉さんとお母さんに関しては一髪で津波を免れたという話は、真



大手書店・大手キミさんを囲んで記念撮影

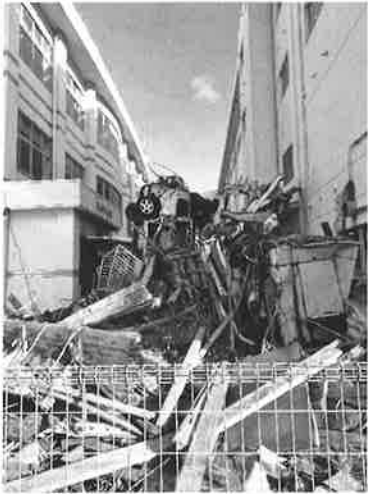
大きな被害を受けながらも今も「町の本屋さん」として多くの本を住民の方に届け続けています。大手書店は被災後、なんと避難所ですぐに書店を再開されたとのこと。店舗をなくしても、「大手書店」の看板を手作りし、すぐに本を住民の方に届け続けました。手作り看板は今も店頭飾られており、書店を続ける、本を届けるという覚悟を示しているかのようです。



に迫るリアルな体験談であるにも関わらず、車窓に映る景色はのどかで、この景色がどれだけ恐ろしいものになったか、その言葉に強い重み加わります(写真左)。

三陸鉄道を下車し釜石市から更に南へ移動、次は気仙沼市立図書館へ。この図書館は、震災から20日後の3月末には再開しました。再開すると何人もの来館者が図書館に来ては、口々に「借りていた本を紛失したので紛失届を書かせてほしい」と申し訳なさそうに言ったそうです。もちろん震災のことを考えれば、紛失も仕方なく考えますが、「借りたものは返す」という人間としての矜持を考えさせられるようなエピソードでした。また当館には2013年8月に神楽坂・日本出版クラブ会館(当時)で開催された「東日本大震災の全出版記録『本の力』」

アルな被害の状況。教室の中に無事なものなどなく、全てがコンクリート剥き出しで色を失ったひどいありさまです。周りに首がする



震災当時の瓦礫がそのまま残る気仙沼市震災遺構・伝承館

ツアー最後に伺ったのは気仙沼市震災遺構・伝承館です。ここは実際に被災した高校である気仙沼向洋高校を震災遺構としてそのままの姿で保存し、見学できる震災伝承館です。映像でしか見ることでできなかったリアルな被害の状況。教室の中に無事なものなどなく、全てがコンクリート剥き出しで色を失ったひどいありさまです。周りに首がする



展」の図書、約2,000点が寄贈・収蔵され、「笑顔文庫」として市民の貴重な資料となっています(写真左)。

ものがないのもあり、不自然なほど静かで、だからこそ目の前の景色と真正面から対峙することになります。テレビでは感じられない質量を持った現実。ただただ圧倒的な震災の力に慄くことしかできませんでした。

今回のツアーで印象的だったのは、海岸に建てられた防潮堤でした。10メートルを超えるそれにより、町から海の景色が望みにくくなり、3月のまだ芽吹かない野原も相まって非常にモノトーンな景色が広がっていました。震災は町から色を奪ってしまったのではないかと。現場に行かなければ気づかないことを多く学びました。しかし、伺った東北の方々は皆さん暗い顔ばかりではありませんでした。震災で尋常ではない被害を受けながらも、書店と図書館は「本を届ける」ことを通し、住民の方の心を支え続けていることを実感しました。

出版記念会

喜びを分かち合える出版人のホールでお祝いの会を。

★会報「出版クラブだより」にてご紹介して、祝賀申し上げます。



受賞祝賀会

受賞の栄誉に輝く喜びを祝賀する集いに、出版クラブホールを。

★ご案内状の作成、印刷、宛名書き、贈呈記念品、花束など、お手伝いのむきもお申しつけ下さい

「時の記憶 場所の記憶」 —三陸鉄道震災学習列車—

ご案内／千代川 らんさん
(三陸鉄道(株)旅客営業部)

今回のバススタディツアーでは、書店・図書館にとどまらず、三陸鉄道の震災学習列車に乗車し（宮古駅〜鶴住居駅）、三陸沿岸部の復興状況も視察することができた。三陸鉄道旅客営業部の千代川らんさんによるガイドは、自身の震災体験を詳細に語りながら、ふるさとの人たちと風景への熱い思いにあふれていた。

8時45分宮古駅発

三陸鉄道にご乗車いただきましてありがとうございます。本日この震災学習列車のガイドを担当します「千代川らん」と申します。今日はよろしくお願いたします。

三陸鉄道はことし4月1日で開業40周年を迎えます。宮古駅から釜石市の鶴住居駅まで、約1時間15分の列車の旅ということで、この沿線の景色、町の様子などを見ていただきながら、東日本大震災から13年を迎えたこの被災地の今の様子や生まれ変わった町の様子なども、ぜひご覧いただきたいと思えます。

被災地を走る鉄道の意味

今ご乗車いただいている三陸

鉄道の震災学習列車についてですが、この列車は震災の翌年、2012年から運行を開始しております。なぜこういう取り組みを始めたかというところ、被災地を走る鉄道として、直接足を現地に運んでいただいて、そして実際にこの列車の中から町の様子を見て、被災地の今や震災で被害にあった場所から学んでいただきたいという思いからでした。被災地に行くことを、最初は遠慮する方というか、行ってもいいのかというような声もたくさんいただいていたようなのですが、来ていただくことが、私たちにとって一番うれしいこととです。テレビや新聞、そういったものからは伝わらないものがあると思います。来てみて初めて知ったことがたくさんありました、という感想もたくさんいただいております。こま

で復旧して、今こうやって歩いていられることに対して感謝の気持ち伝えていく場でもあります。

では、この辺りから実際に津波の浸水区域を走ってまいります。ここが宮古市の金浜。もともとはこの海の近く、今更地になっていく場所にも全部家がございました。

この地域の震災後の町づくりとしましては、高台移転という



車内で説明をおこなう千代川さん

形で、もともと山だった場所を更地にして、そして宅地を造成して、そこに新しい家がどんどん建てられて、それに伴って新しい道路もたくさんできてというような状況です。そういった町づくりが被災地各地で行われてまいりました。

この宮古市の金浜地区の防潮堤は高さ約10メートルございます。この海をぐるりと囲むように、向こう岸のほうまでこの

1枚の壁のように続いております。

そして、列車は宮古市の津軽石地区という場所にやってきました。今、ちょうど走っているこの辺りをよく見ていただくと、住宅の基礎が残っている場所がまだあったりするので、この線路沿いには家がたくさん立ち並んでいました。しかしこの場所に、津軽石川から津波が押し寄せてきて、この線路を伝うように、地区の中心部の

近くに川があったりすると、そこを津波が逆流してあふれるというような、海から離れた場所でも津波の被害があった場所が他に幾つもございます。

まもなく1つ目の停車駅の津軽石駅に到着となります。この津軽石駅の駅舎も津波の浸水被害に遭っております。

津軽石駅では、震災当時、地震が発生したその時に、車両がちょうど停車中でございました。その車両が津波によって脱線するという出来事が起こった場所でございます。2両編成の車両で当日は20名ほどのお客さまが乗っていたそうです。たまたま、この日は二分半ぐらい遅れて駅に到着した、その直後に地震が起きたということです。

もし時間どおりに走っていたとしたら、この川の近くや、もし

走っていた可能性もあったということですが、運良く偶然が重なって、駅に止まっている時に地震が発生したため、その後すぐ近くの避難場所まで避難できたという記録が残っております。レールの上に車両が止まっている状態なのですが、車両の前側のほうから津波が押し寄せてきて、後ろにぐぐっと押すような形で車両が脱線してしまいました。

私の被災体験

ここからは私の個人的なお話をさせていただきます。私は山田町の陸中山田駅という駅の近くで生まれ育ちました。震災当時は小学校6年生で、実際に自宅が被災をしまして、その後避難所生活、それから仮設住宅での暮らしを経験しました。きょうはこの三陸鉄道の社員としてだけではなくて、地元住民の一人としても、この震災について少しお話しさせていただきます。と思います。

まず13年前の3月11日ですが、小学校がちょうど卒業式で1週間前ぐらいのタイミングでこの震災を経験しました。間違った人生の中で一番大きな地震、大きな揺れだったというのを今でも覚えております。地震の揺れももちろん怖かったのですが、今自分があるこの学校の

校舎が崩れるのではないかと、そういつた恐怖が先にたち、この後津波が来るという、そういった考えは、全く頭に浮かんできませんでした。今まで津波を経験したことがなかったため、どうせ今回も警報が出ても、その後解除されれば家に帰れるだろうなどという事を考えていたところに、学校に親が迎えに来ました。これでやっと家に帰れるなと思った時に、初めて津波が来たという事実を告げられました。私が通っていた小学校は高台にありました。ですので、私は津波の様子を自分の目で見ていません。

家族の中で私だけが津波の様子を見ていなかったのも、最初はどこかやっぱりひとごとのような、たいたことないのではないかなんてことも考えていたのですが、その日の夜、少しずつ状況が悪化してきました。私が住んでいる山田町で津波の後に火災が発生したのです。

今年の1月1日、能登の地震の時も火災が発生しましたが、自分が3・11の時に見た、そのままの様子をテレビ越しに見ているような感覚になりました。

津波を見ていないというのがあるのですが、やはりその日の夜の火事、火災が一番怖かったというふうな記憶しています。自分の今いるところまで火が迫ってくるのではないかと、余

震も続いている中、爆発が起るたびに、町が揺れるぐらい、ほんとに大きい火災になっていましたので、一睡もできない不安な状態で一晚を過ごしたのを今でも覚えております。

避難生活で考えたこと

やっと朝が来て、手元にあっ

した。そこから約3カ月間避難所生活を送りまして、その後、その年の6月から2019年の3月まで仮設住宅で生活を送りました。

避難所生活で苦労したこと、最初のうちは見ず知らずの人たち、同じ町内といえども、見たこともない、話したこともない人と同じ場所にて生活を

していたと思います。失ったものはもちろんたくさんありますが、この震災を経験して学んだこととか、逆にプラスになったもの、自分の中でいい経験になったなと思うことも実はたくさんあることを、この13年を振り返ってみて思います。

間もなく陸中山山田駅に到着い

乗車記念証明書。今回乗車した宮古一鶴住居間は比較的内陸を走っていることがわかる

三陸鉄道
リアス線
記念乗車証明書

久慈 陸中宇部 陸中野田 野田十府ヶ浦 野田玉川 野田 白井海岸 白井 磐代 田野畑 島越 岩泉 小本 新田老 佐羽根 山口留地 磯鶏 津軽石 豊間根 陸中山山田 織笠 岩手船越 浪板海岸 吉里吉里 大槌 鶴住居 両石 金石 平田 唐丹 吉浜 三陸 南嶺 恋し浜 綾里 盛前赤崎

白井海岸-堀内
織笠-陸中山山田
吉浜-唐丹

三陸鉄道リアス線に乗車されたことを証明いたします。 三陸鉄道株式会社

たラジオから津波の被害の様子やいろいろな情報が少しずつ届き始めて、自分の町だけではなく、岩手県やそのほかの県でも津波によって甚大な被害が出ていることが少しずつ分かってきました。もちろんその日を境に自宅に戻ることができなくなってしまうので、震災発生から約1週間は車中泊をしま

しなければならぬことでした。もちろん年齢層もさまざま、高齢の方もいれば、自分のすぐ隣のご家族はまだ1歳の小さい男の子がいました。

それでも、みんな同じ大変な状況を乗り越えて今いる仲間として、みんなでこのつらい状況を頑張って乗り越えていこうと

たします。

この山田町に到達した津波なのですが、勢いがちょっと弱かったということもあって、流されてきたがれきが行ったり来たりする波で、だんだんがれきを中心に集まっていき、そこから火も出て、がれきを伝って燃え広がっていったと聞いております。震災当日、もちろん停電

山田町の特産品のカキとホタテの養殖いかだがこの山田湾に浮かんでおります。山田湾のつくりが湖のように丸く、そして水面が穏やかな特徴を生かして、昔からこのカキ、ホタテの養殖業が盛んに行われております。

皆さま、窓の外をご覧ください

三陸の美しい光景と地域の課題

い。ここに鯨と海の科学館という白い建物がございます。津波が2階部分まで到達したというラインが日付とともに記されています。この辺り一帯、今は公園として整備されているのですが、もちろん津波の被害がございます。ちょうどこの場所が船越半島という半島のちょうど付け根の部分で、両側の山田湾、船越湾という2つの海に挟まれているというようにつくりでございます。震災時、この両側から津波が同時に押し寄せました。そしてこの間の部分がすべて浸水、水没、そして道路も壊されてしまうというような、この向こう側に行く手段が断たれてしまうというようなことになってしまいました。

この防潮堤をたどっていくと、高台に小学校の校舎が見えると思います。震災で被害を受けて、その後新しく建て替えられました。少子化の影響により今年度で閉校となります。震災前はこの山田町内に9つの小学校があったのですが、今や2校だけになってしまいました。中学校ももともとは2つあったものが、統合して今や山田中学校だけになってしまいました。人口減少と少子化問題は被災地の深刻な問題です。

山田町には高校もございません。町内唯一の高校なのですが、一学年30人くらいでしょうか。

山田町の外の高校に進学する人も結構多く、私自身もそうだったのですが、山田町から宮古市の宮古高校まで当時通っておりまして。その時は鉄道もなかった。その時はバスで1時間ぐらしかけて毎日通っていました。やっと海が見えるところまで走ってまいりました。きょうは天気も良く晴れておりますので、この三陸海岸の景色をご覧いただけると思います。

この三陸海岸の地形の特徴としては、海と山がものすごく近くて、ギザギザと入り組んだりアス式海岸、もしくはリアス海岸というふうと呼ばれている地形になります。先ほども宮古湾、山田湾、船越湾を紹介してきましたけども、入り組んで丸く、どんだん陸地に近づくにつれて海の面積が小さくなっていくという、特徴がある地形でございます。海と山が近いということ、私は夏場になると、この山の青々とした様子、海がきれいにきらきら輝いている様子が個人的にはすごく大好きです。このあたりは秋になると紅葉もきれいです。四季を通してさまざまな景色が見られるというのも一つ特徴かな、いいところだなというふうにも思っています。

今日ご乗車いただく中で、一番海に近い場所までやってまいりました。こちらが大槌町の浪

板海岸という場所でございます。夏場になると海水浴場がオープンしますし、年中、平日休日問わず、サーファーの皆さまがこちらにやってまいります。今、浪板海岸駅をちょうど通過しております。

この駅のすぐ目の前まで津波が到達しています。ここからはきれいに海を見渡せる場所になっておりますけれども、この浪板地区には防潮堤の建設がされていないところで、その代わりに道路を少し高く造って、壁のような役割を果たしています。それから防潮林という形で、松林がちよっと斜めに、今にも倒れそうになっているこの木たちが、津波で生き残った木たちです。その横に震災後に植樹した松の木が、少しずつ背を伸ばしてきています。

これからの町づくり

続きまして、大槌町吉里吉里地区という場所にやってまいりました。目の前には吉里吉里海岸が見えてきます。吉里吉里は、春になると桜がきれいに咲く桜の名所となり、沿線の中で桜と車両と一緒に写真に撮れる場所ということで、鉄道の写真を撮る趣味の方が春になるとカメラを持って訪れてくださいます。この辺は少し海から離れていることもあり、津波の浸水被害

害は直接はありません。海のすぐ近くの場所だけ浸水被害に遭いました。津波の被害に遭わなかった場所でも、もともと空き地だった場所や、山を切り開いて宅地を造った場所に、どんどん新しい家が震災後造られていっておりますので、震災前にあった同様な光景が残っている場所は、実はあまり多くありません。

トンネルを抜けますと、大槌町の中心部に入っております。震災後の大きな変化としては、この海手側の高さが約14メートルの防潮堤、そしてこの大槌川の河口付近に建設された大槌川水門です。ものすごく大きな水門と防潮堤で町を守っているというようにつくりになっております。

今のこの町のつくりとしましては、この線路を挟んで海手側の地域は浸水区域になります。災害危険区域とも呼ばれておりますけれども、家を建てること

が禁止されております。ですので、更地のまま放置されていたり、広くなったスペースを有効的に使うということで、サッカーグラウンドが整備されていたり、広い公園が造られていたりしています。そして線路を挟んで反対側が町の中心部でございます。駅を中心には徒歩圏内に役所や銀行、郵便局、病院もあるコンパクトな町づくりに

なっております。

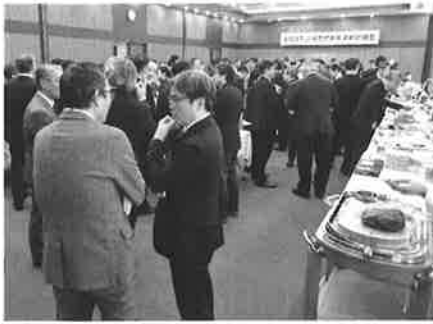
大槌駅を出発いたしました次の駅が終点の鶴住居駅でございます。トンネルを抜けますと鶴住居町のほうに入っております。これから向かう鶴住居町は、釜石市の鶴住居地区というところなのですが、市内の中で津波での被害が特に大きかった場所でございます。トンネルを抜けると町の様子が見えてきますけれども、防潮堤があつて、そして空き地がたくさんあつてというような、少しさみしい景色をご覧ください。ことになりました。

釜石市鶴住居復興スタジアムが見えてまいりました。2019年のラグビーワールドカップの会場になりました。ワールドカップの時には仮設スタンドを造りまして、国内外からたくさんの方においでいただいた場所でございます。

それでは鶴住居駅に到着となりました。本日は皆さまありがとうございました。ごさいました。

(構成)「出版クラブだより」編集部

震災学習列車のお問合せ
につきましては、三陸鉄道
ホームページより「震災学
習列車」を検索、もしくは
三陸鉄道旅客営業部（TE
L 0193・71・11
70）までお願いします。



第71回 読書のめぐみ運動(主催/日本出版クラブ) 96社より1万8千余冊の図書を寄贈

読書週間行事として実施している「読書のめぐみ運動」は、今回で71回目を迎えました。読書の機会に恵まれない人たちのもとへ届けられた本は約178万余冊となり、各所よりたくさんの方の感謝が寄せられ、名実ともに全国規模の運動として継続されています。

今回は、96社のご協力を得て、1万8185冊の図書が全国の矯正施設や児童福祉施設等に寄贈されました(第71回までの総冊数1178万473冊)。また、運送経費等に充てられる協賛金も23社のご協力をいただきました。厚く御礼を申し上げます。また、皆さまからお預かりした図書を一時的に保管する場所として、本年度も昭和図書のご協力を賜りました。改めて御礼を申し上げます次第です。

図書寄贈協賛社名

- 音楽之友社 偕成社 風間書房 Gakken KADOKAWA
- A 教育芸術社 京都新聞出版 センター 共立出版 近代映画社
- 近代消防社 金の星社 工藤出版サービス くもん出版
- 暮しの手帖社 研究社 建帛社
- 音楽之友社 偕成社 風間書房 恒星社厚生閣 佼成出版社 講談社 光文社 国際紙パルプ商事
- 国土社 小峰書店 三修社 三省堂 CQ出版 集英社 小学館
- 小学館集英社プロダクション 彰国社 昭文社 新生紙パルプ商事 新潮社 数研出版

2024年 出版関係新年名刺交換会開催

「2024年 出版関係新年名刺交換会」が、1月9日(火)午後0時30分より、神田神保町の出版クラブホールで開催され、約350名の出版関係者が参集した。

会には日本出版クラブの野間省伸会長をはじめ、日本書籍出版協会・小野寺優理事長や日本雑誌協会・堀内丸恵理事長、日本出版取次協会・近藤敏貴会長、日本書店商業組合連合会・矢幡秀治会長の出版関連団体ト

ップが一堂に会した。

代表して野間会長は「出版業界には、流通に係る2024年問題をはじめ、出版者の権利、生成AIの議論など様々な難問が山積しており、どれもひとつの社の努力だけでは解決しきれない大きなテーマです。出版クラブの創設の理念である『出版界の総親和』のもと、力を合わせてこの難局を乗り越えていくにはありませんか」と挨拶し乾杯をおこなった。

- 成美堂出版 誠文堂新光社 世界文化ブックス 増進堂・受験研究社 第一学習社 第三文明社 大修館書店 大日本図書
- 高橋書店 淡交社 筑摩書房 チャイルド本社 中央公論新社
- つり人社 帝国書院 東京化学同人 東京創元社 東京堂出版
- 童心社 徳間書店 永岡書店 二女社 西村書店 日本ヴォーグ社
- 日本紙通商 日本紙パルプ商事 日本教文社 日本実業出版社
- 日本標準 農山漁村文化協会 培風館 白泉社 博文館新社
- ぴあ ひかりのくに 福音館書店 双葉社 ブティック社
- フレールベル館 文英堂 文化出版局 文藝春秋 平凡社
- ベレ出版 ポプラ社 マガジン

- ハウス 丸善出版 光村教育図書 緑書房 山川出版社 理論社 黎明書房

協賛金協力社名

- 医療薬出版 WAVE出版 共同印刷 恒星社厚生閣 国土社
 - コロナ社 実教出版 裳華房 昭和図書 成美堂出版 第一出版
 - 大日本印刷 ダイヤモンド社 グヴィッド社 電気書院 図書印刷 日本加除出版 日本文教出版 博文館新社
 - ひかりのくに 富士経済グループ本社 文化産業信用組合 牧製本印刷
- (以上23社)
(社名五十音順)

第63回全出版人大会の大会委員長に 喜入冬子氏(筑摩書房社長)が選出される

2023年12月11日(月)、一般財団法人日本出版クラブ理事会並びに評議員会が開催され、「第63回全出版人大会」の大会委員長として喜入冬子氏(筑摩書房)が満場一致の賛成で選

出された。女性の大会委員長は、1998年の野間佐和子・日本出版クラブ前会長以来2人目である。会は2024年5月7日(火)午後3時より、ホテルニューオータニで開催される。

第63回 全出版人大会

日時/2024年5月7日(火) 午後3時より
会場/ホテルニューオータニ東京 鶴の間

出版 歳時記

▽「真実を知り、嘘をつけ」その一言に思わず、この言葉を発した映画監督の五十嵐匠の顔を二度見してしまっ

た。私は2021年の夏から縁があつて映画「じよっぱり―看護の人花田ミキ」のプロデューサーをしている。映画は構想から公開まで長い時間を要するもので、関わり始めてから3年近くが経ち、やっと完成した。全国公開は今年の秋ごろになる予定だ。

▽花田ミキ(1914~2006年)は青森県に実在した保健師・看護師である。青森県弘前市出身で地元の高校を卒業したあと岩手県の日本赤十字盛岡看護婦養成所を経て、昭和9年(1934年)に日赤青森県支部の看護師となった。昭和9年は、東北と襲った大凶作の年で、欠食児童の増加、女性の身売りが後を絶たなかつた。身売りがされた女性が結核などにかかり故郷に帰されることが多い村では隔離され、死を待つしかない光景を花田は見ている。日中戦争、太平洋戦争が

真と嘘と映画の話

起こると花田は従軍看護婦として3度、戦場に召集される。野戦病院で看護をしてけがが治った兵隊はまた戦場に送られる。戦地に戻る兵隊の姿を見て「私は人を死なせるために、看護した」という思いを抱くようになる。戦争に対して強い怒りを抱き「命を阻むものはすべて悪」という信念を持つようになる。戦後は、ワクチンなきポリオとの闘い、青森県立高等看護学院(いまの青森県立保健大学)の開校、乳児死亡率の解決策として行った「もつたらころすな」運動など、県民の命を守るために走り続けた人生であった。

▽さて、今回の映画では花田ミキ役を木野花さん、花田ミキさんの若いころの役は舞台で活躍する伊勢佳世さんが演じている。また、晩年の花田ミキと出会うシングルマザー役を、最近テレビで見ない日はない王林さんが務める。加えて、元力士の舞の海秀平さん、草野とおるさん、相馬有紀実さんと青森県出身の俳優がわきを固める。

▽さて、最初の監督の発言に戻

ろう。映画館での上映はもう少し先だが、ロケで協力をいただいた青森県佐井村の皆さんに感謝を込めた完成披露試写会を行った。参加者から「このセリフに感動しました」という感想が届くと、監督は「あれは、花田さんの自伝に書かれていた言葉なんです」と返す。感想が届くたび、「それは四国で活動していた保健師の記録です」「それは県庁の記録です」と答えていく。参加者全員が家路についた後、監督が「花田ミキは実在の人物だけど、役者を使う劇映画にした瞬間それは『嘘』になる。でも真実を知ったうえで、『嘘』をつくことが100年残る映画になるか否かの境目だ」と語ってくれた。

▽映画の手伝いは資料探しの連続だった。本の検索はもちろろん、県庁時代の机の上は何がのつていたか、昭和9年の日赤の制服、当時リンゴ農家が使っていたかごなど、山ほどの資料と格闘した。映画のシナリオすべての言葉が、資料の引用だ。エビデンスがある。この映画は、嘘が真か!

ぜひ映画館に足を運んでみてもらいたい。(幸)

編集雑記

☆4月です。「出版クラブだより」は奇数月発行を基本としています。昨年年度より事業計画、収支予算をお知らせするためにこの号は3月ではなく、4月発行にしております。出版クラブの活動に少しでも理解が深まれば幸いです。

☆4月です。いわゆる「2024年問題」が現実のものとなります。トラック協会をはじめとした関係

の皆様のご尽力のおかげで、一部遅配が発生するものの、何とか出版物を書店さま、読者さまにお届けすることができそうです。とはいえがんばって作ったものがお客さまに届かないこともなかりかおません。どうぞればお届けできるか、立場の違いを乗り越えて考えていくべきではないでしょうか。

☆東日本大震災から13年、バススタデイツアーに行つてまいりました。詳しい報告は2面以降をご覧ください。

いただくことにして、気仙沼の魚市場の前の食堂で昼にいただいたアナゴの天ぷらがおいしかったです。昔は東北でアナゴは獲れなかつたとか。海も温暖化しているようです。

☆今年の全出版人大会の恒例の風呂敷は、この1月に101歳で天寿をまっとうされた榎木沙弥郎さんの絵によるものです。5月7日(火)午後3時、みなさまご参加ください。

出版クラブは皆さまの「クラブ」です。
お気軽にご利用頂ければと存じます。
出版イベントや各種会議・セミナー等
益々のご利用をお待ち申し上げます。

出版クラブホール・会議室

PUBLISHERS CLUB HALL

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 1-32
出版クラブビル
TEL 03-5577-1511/FAX 03-5577-1772
<https://shuppan-club-hall.jp/>

神保町駅(東京メトロ半蔵門線、都営新宿線・三田線)
A5出口より徒歩2分

